

## アイヌ文化伝承活動について

8月31日(水) 18:00~19:30 東京会場

講師 宇佐 照代 アイヌ文化活動アドバイザー

私は、北海道釧路市の出身で、現在はレラの会という団体を中心として活動しており、最近では、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のアドバイザーとして、小学校や大学、文化サークルなどでアイヌ文化の紹介などを行っています。

レラの会は、伝承活動をする拠点としてアイヌ料理店「レラチセ」をオープンさせ、今年で11年目に入りました。このレラの会でスタッフとして働いたり、料理をつくったり、楽器などを使ってアイヌ文化を紹介しています。

アドバイザーとしては、小学生は総合学習の時間などを主として、中学生は異文化教育の時間を使っていたりして学習していただいています。高校生は、修学旅行の事前学習として、北海道に行かれる前にいろいろわかりやすくお話をしたりしています。あと、アイヌ文化に関心のある市民グループや団体の要請があったりすると、料理と一緒につくったり、歌や踊りを一緒にしたりしています。

個人の活動としては、最近では北海道にある北海道ウタリ協会札幌支部が札幌市で毎年開催しているムックリ大会などに参加しています。関東の方ではそういう催しがないので、こちらから北海道に出向いて参加し、いろいろなことを学んでいます。

さて、伝承活動のきっかけですが、私は北海道釧路市の春採で生まれ育ちました。母は北海道ウタリ協会釧路支部の会員だったようですが、支部の活動にはまったく関わっていませんでした。10歳ぐらいのときに、親の都合で東京に移りましたが、ちょうどそのころ、私の祖母の西村ハツエが「関東ウタリ会」という団体から「レラの会」を設立させました。毎月集まりがあり、よく母に連れられていって、自然にリムセやウボボ、それからムックリなどを覚えるようになりました。その集まりでは、ウタリのおばさんたちが楽しく踊りを教えてくれたりしまして、祖母は私たちが踊りを覚え

るのをすごく喜んでいました。まだ子供だったからか、そこでは難しい話はほとんど聞きませんでした。祖母も昔の話しや差別の話をするのはまったくありませんでした。祖母はリムセやウボボはあまり得意ではなかったようですが、アイヌ民族の権利回復のために、都庁などに何度も足を運んだり、いろいろ活動していたようです。

その頃、まだ子供だった私や妹などは、ただ踊りが楽しくて、私ができるのはこれくらいだという気持ちで関わっていたわけですが、大人たちは口でははっきりいいませんが、若い子たちにもっと覚えてもらいたいと思っていたようでした。今でこそ若いウタリで活動している人がたくさんいるように感じますが、20年以上前は、踊りを覚えたりする子はあまりいなかったのですね。私たちにはすごくプレッシャーだったのですけれども、徐々に、私たち若い子が伝承していかなければ、リムセやウボボなどいろいろな文化が無くなっていくのではないかと、受け継いでいかなくては考えるようになりまして、今ではリムセやウボボ、ムックリだけではなく、刺しゅうや木彫り、アイヌ語、それから歴史などを、少しずつですけれど学ぶようになりました。

アドバイザー活動では、行った先の子供たちに少しでもアイヌのことを知ってもらおうと、なるべくわかりやすく話しをし、小学生、中学生には身近なアイヌ語などを使って教えています。それから、手製のポスターを持っていきます。私一人...メノコ(女性)だけで行くので、男性の姿



を説明したりするのに、ただ黒板に書くだけではなくて、こうやってポスターを見せると子供たちがけっこう興味を持って覚えてくれます。この間もこのポスターを持って中学校に行きましたら、「しばらく貸しておいてください」といわれました。ポスターを使って学習してくれたみたいです。ちなみに、そのときは女の子たちでしたが、料理とか刺しゅう、ムックリを体験してもらって、とても楽しい時間を過ごしました。ある女の子は本当に楽しかったのか、「アイヌ最高」といつてくれたのですね。この私の気持ちが伝わったのだと思います。「アイヌって何」とか、「アイヌってまだいるの」「アイヌって日本人でしょう」という大人がいっぱいいますが、少なくともあの女の子たちは、そういう大人にはならないと思います。

先日、妹の子供の誕生会があり、母や子供たちが集まって一緒に食事をしているときに、子供たち... 6歳、5歳、4歳、1歳半と、4人いるのですけれども... が、自然とリムセやウボボ、ロクウボボ（座り歌）とかをやり始めまして、手拍子をしながら、私にもやれというのですね。そのとき子供たちがやっていたのは「色男の舞」です。色男役の4歳の男の子を真ん中に座らせて、6歳の長女が私に相手方をやれというわけでした。私は、めんどくさいと思ったのですけれども、私がここで一緒に踊りながら教えてあげたほうが、自然と覚えるんだなと思って、一緒に踊ってあげました。妹とも話したのですが、これが本当のリムセやウボボなんだなと思いました。人に見せるのではなく、ただ単に楽しく、食事をしながら自然に出てくるウボボやリムセを体験でき、子供たちも自然に伝承しているのがわかって、とても楽しかったです。

民族を意識して伝承活動を行っているのですけれども、親から子へ、子からまたその子へと、伝承することの大切さを考えるようになりました。たとえば、去年、北海道大学の北方資料室に、私の曾祖母のウボボ（歌）がレコードに残っていると話を聞き、それで母と妹、妹の子供らと北海道大学に行って、そのウボボを録音してきました。資料室から出てきてくれたレコードには、宇佐タマと曾祖母の名前があり、「わー、すごい」と、みんな感激しました。57年前、曾祖母がそのとき57歳だか58歳と書いてありましたが、曾祖母の声が出てきたときに、何故か私は涙がぼろぼろ出てきて、妹の顔を見ると、妹もぼろぼろ涙を流していました。その後、車の中などでも一緒に聞きながら大合唱したりするのですけれども、やっぱり同じようなところで、顔を見ると二人とも涙を流しながら聞いていました。それまで伝承、伝承といっているも、祖母がアイヌというのはわかっていたのですが、直接教わるということがなかったのです。精神的な部分だけはあったのかもしれませんが、いずれにしても、曾祖母の声だと思うと、すごく感動して聞きました。

さて、曾祖母のウボボが聞けたりしますと、どんどんルーツを知りたくなってきました。私の祖母は西村ハツエといいますが、去年の11月に倒れて入院してしまいましたので、入院先で慌てるような感じで、祖母の体調のいい時と見計らってどんどん聞き取りをしました。そのときに祖母

の母親の名前を聞きました。床スエといいますが、「床」という苗字のアイヌの方はいっぱいいるので、床家と親戚なんだということがわかって、いろいろ聞き取りを始めたり、除籍謄本とかも取り寄せたり、阿寒の床ヌプリさんのところに行って聞き取りをしたり、また、釧路にお墓があるので、そのお墓に行って名前をいろいろ見て書き取りをしたりしまして、ルーツ調べをしたのです。それから、祖母の妹から、曾祖母の写真も手に入れました。祖母とは似ていませんが、80年ぐらい前の写真です。

祖母が倒れて入院した当初、意識がなかったのですが、ベットで寝ている祖母の手をずっと握って、「おばあちゃん、頑張れ、頑張れって。まだまだ頑張れ」といつていたのですが、意識が戻って目を開けて、私が横にいるのがわかると、いきなりせきを切ったように昔の話をしてくれました。戦争の話とか、ロシアの兵隊が家に入ってきて、怖い思いをしたとか、いろんな話を一気にいつて、私のことを祖母は「てる」と呼んでいるのですけれども、「てるはこれから民族の誇りを持って頑張っていくますって、ばあちゃんの前で今発表してください」というのです。私は、「わかった、わかった。じゃあ発表するよ」といつて、祖母の手を握りながら「てるはこれから民族の誇りを持って頑張っていくます」といつました。祖母はにっこり笑って喜んでいました。そして、それを契機に、今まではしてくれなかった昔の話をしてくれるようになりました。

祖母が入院しているとき、祖母の友達の伊賀信子さんがお見舞いに来てくれたのですが、二人はアイヌ語でしゃべっていたのです。私は「ええっ、おばあちゃん、アイヌ語しゃべれるの?」と伊賀さんにいつと、「あんた、おばあちゃん幾つだと思っているの」といつわれて、「それはそうだな、アイヌとして生まれて、産みの親も育ての親もアイヌだから、おばあちゃんがしゃべれないわけないな」と、そのときそうわかったのですけれども、それを私が知らなかったという事実と、それを祖母が私たちに教えようとしなかったということが、少しショックでした。しかし、祖母の本音は、これからも私に民族の誇りを持って頑張っていくてもらいたいと思っていたのだという気持ちが伝わってきて、うれしかったです。西村ハツエは、頑張りましたが、残念ながら4月に亡くなりました。もっともつとついろいろなことを教えてもらいたかったなと思います。そして、この私の経験から、私も今勉強していることを子供たちにいろいろと教えてあげたいなと思います。

さて、このチカッ美恵子さんが書かれた『森と大地の言い伝え』（北海道新聞社、2005年）という本をご存じでしょうか。この本に「山本家先祖の名称と20代目からの系図」というのが載っています。私が調べてみると、床スエというのが、この系図には床エパカシとあるのですが、そのエパカシの孫が西村ハツエであることがわかりました。釧路のコタンコロクルの末裔になります。すごく大変でしたけれども、調べがいがあったよかったです。